

『物語と歴史の文化学Ⅰ』

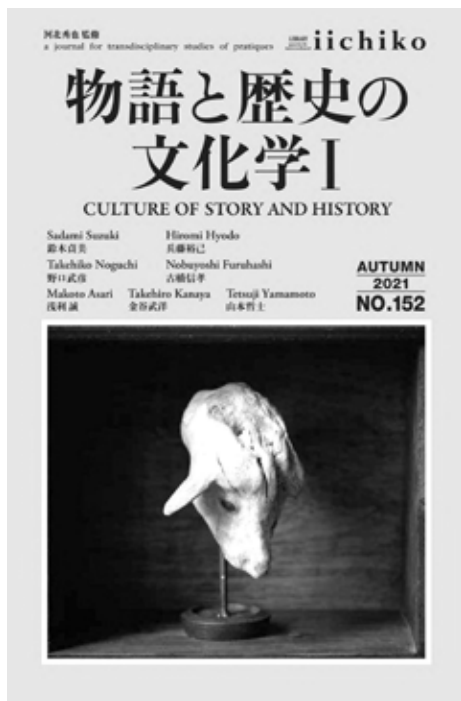
LIBRARY ICHIKO 152 AUTUMN 2021 10月31日 発売予定

「物語」とは、「物の語り」。その「物」は物体ではなく、「もの」という魂・霊であり、それを語るもの。「古事記」「日本書紀」という神話を内包した「歴史」が、物語を内在させていたことから、大和物語、竹取物語、源氏物語などを分節化した「歴史」が、古今集を屈折点にして歌と文学を文学的生産しながら、平家物語のように歴史を兼ねた物語となり、「太平記」「方丈記」なども生み出す。武士制の抬頭において大きく変容していきながら江戸期の想像的氾濫を排出し、一挙に明治近代において変貌していく様式は、何を日本がそのシニフィアンにおいて作用させて、今日を形成してきたのか。伝統を何か保守のようにみながら、大事なものを棄却したり忘却したりしながらも、しかし、述語制の本質は確実に残存している。欧米では「narrative」が構成される、ただの金銭表示ではない。

文学理論の展開は、哲学や社会科学の転移と並走してなされてきたが、哲学への根本的な見直しを要求しながらも、ともすると饒舌さと恣意的概念世界の氾濫において、何が転移の要であるのか多分に見失っているようにもみえる。他方、日本の個別の文学研究は非常に高度化されているが、しかし欧米の文学理論に転換を迫るような理論生産にならなっていない。それは、歴史理論や社会科学理論の概念転換へ迫るものにならなっていないためである。表出と表出史との間、思想と思想史との間には、多様なシニフィアン／シニフィアンスのシニフィエされていない場所が未踏としてある。

哲学・社会科学の概念転移世界と文学理論の概念転移世界との境界における「空虚」へ「穴」に、何が潜んでいるのかを、日本文学と歴史との関係から明証に浮き立たせていきたい。文学テキストと哲学的テキストは、欧米でも日本でも異なった仕方で読まれてきた。哲学は真実を求め、文学は虚構として非真実を楽しんできたという「虚構」を脱していくことなのだが、ポール・ド・マンやデリダの「語ることの失敗」という次元の先をどう開けるのかだ。「文学」についてのメタ言語の中へ言語学的な用語を導入すること（ド・マン）の先に問題構成される物語であるのだが、あまりものたくさんの物語が提示されてカオスにある界隈を脱していくことを要される。新たな言説生産が可能なる諸条件を再配置していきたいのだが、構造論的かつ言語的な大転回を客観化する転回をなしていくことに不可避になる。人類の存在の根源を探る困難な問題であるからこそ、コロナ禍の混沌世界を医療処置だけにまかせておけない、自分自身のことの探究である。探究に終わりはなし……。

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二二年一月末発行予定



A5 変形 128頁 1650円 (本体+税10%)

【監修・アートディレクター】
河北秀也 (かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士 (やまもと てつじ)
1948年生まれ。政治社会学、ホスピタリティ環境学。主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RICK」 → Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

物語と歴史の文化学Ⅰ

LIBRARY ICHIKO 152 AUTUMN 2021 1950円 (税込)

ISBN 978-4-910131-20-7 C1010 ¥1500E

書店名

部数